

# 高山

たかやま  
高山の原生林を守る会

会報 第 64 号

2008年3月



## 不動湯周辺雪上観察会

2月3日(日)に不動湯周辺の雪上観察会を実施しました。参加者は25名でした。厳冬期の観察会ですが、参加者は女性が圧倒的多数を占めました。

駐車を予定していた男沼入り口のスペースがワカサギ釣りの車で満車状態となっていたのは想定外でした。駐車する場所の確保に時間をとってしまい、出発は10時過ぎになってしまいました。いつもですとこの時期は高山ツアーのトレールが見られる男沼林道ですが高湯スキー場が廃業したためか人が徘徊した気配は全くありません。真っ新の積雪を思い思いに踏みしめて不動湯へいたる林道を進むと雪原はノウサギの遊び場と化していました。

柵森の南斜面の県有林に至る林道入り口にあった杉林が前年の秋に皆伐されたため急斜面は崩壊しそうな危うい光景となっていました。急斜面の上には高山山麓の代表的な森林であるミズナラクリ林が広がっていました。これは伐採後のブナ植生帯下部に広く見られる落葉広葉樹二次林で、植林を免れた山域に残っているものです。気持ちのよい林間を思い思いに散策しました。



柵森南斜面入り口の皆伐後の民有林

## 高山山麓雪上観察会に参加して

本多 愛子

春はまだまだですが、二年間の冬眠から目覚めて2008年2月3日の観察会に参加しました。

四季の里の集合場所には総勢25名の参加者が集合しました。この時期の観察会としては、今までで2番目の参加者数とのこと。今年は雪が少なかったため、皆様雪に飢えていたのですね。懐かしい顔に温かく迎えていただいて出発式のあと6台の車に分乗して目的地に向かいました。

土湯温泉から女沼、男沼方面に向かい、途中の分岐から男沼林道を不動湯方面に入って驚きました。車がずらっと駐車しています。男沼にわかさぎ釣りにきている人達の車でした。雪だまりに車をはまったり悪戦苦闘してようやく駐車スペースを確保。いざ出発です。最前列にスキー群、次がスノーシュー、最後にワカンと長い長い列になりました。

雪は降っていましたが暖かいため雪の結晶を見ることはできませんでした。進むにつれて小動物の足跡発見。うさぎ、りす、きつね、山鳥と守さんの案内と解説で冬山の観察を楽しみました。アカマツの植林の伐採の後の2次林には、コナラ、ミズナラ、ブナが生えていましたが2次林が生える時の気候に左右されるということで原始林に復帰することはありえないということでした。ここでウダイカンバ発見。スキーの人達は急な登りは苦勞していたようです。

お昼は高橋さんの迷彩色のツェルトの下、雪のテーブルで素敵なランチでした。雪は降り続いていましたが、不思議と寒くはなかったです。帰りはスキーの人達につられてひたすら下りてしまいました。時間が早かったので男沼にわかさぎ釣りを見学にいきました。林道から10分歩かないうちに色とりどりのテントが沼の氷の上に張ってあるのがみえます。去年は暖かく氷結しなかったそうで今年は寒いのですね。温暖化が進む中で何かほっとします。氷の厚さは10センチ位と聞いて大丈夫かなと怖くなりました。

雪にはまった車を引き上げて四季の里の集合場所に戻りました。時間は予定通り。次回の観察会の再会を誓って解散しました。二年ぶりの観察会楽しかったです。時間がのんびり流れました。



観察会風景



ミヤマガズミの冬芽は華やか



小雪の中の昼食

## 風景印の旅（1）

鎌田和子

これは2007年の冬から始めた「風景印の旅」がきっかけで、私自身に起こった興味・関心の移ろいに着目した話です。「風景印の旅」というのは、各地の郵便局の風景印を集めて、さながら日本の名所・旧跡を旅している気分を味わおうというものです。

どちらかというと、私は樹木は落葉樹が好きです。照葉樹に目を向けることはあまりなかったように思います。ところが、兄が送ってくれた「風景印」の図案に「天然記念物・アラガシの木」というのがあったことから、アラガシとはアラカシのこと？アカガシというのもあるけど、アラカシとアカガシはどう違うの？と図鑑を調べたり、会報「高山」の60号



医王寺のシラカシ

と 61 号に会員の山内さんの「福島のもうひとつのブナ科林帯」と、「東北照葉樹の回廊『みちのく海の常葉路』の夢」という文章が載っていたことを思い出して、読み返してみたりするなど、急に照葉樹に対する興味が喚起されてしまいました。

そして、姉の嫁ぎ先の「医王寺」（飯坂平野）に福島市指定の天然記念物・シラカシの木があったことを思い出し、そのシラカシを見に出かけたのです。ずっと以前（昭和 41 年）に天然記念物に指定されたことを知ってはいたのですが、きちんと立て看板を読んだり、その樹木を眺めたりしたことはありませんでした。それは巨樹でした。寛永の時代に植えられたものだそうで、推定樹齢 300 年とか。「高山の原生林を守る会」で、よくブナの巨樹を観察し、「う～ん、すごいわ！」と眺めていましたが、シラカシの巨樹も見事なものでした。痛々しいほどに手当てされている古木に胸がつまる思いがしました。根元にドングリをいっぱい落としているから、営みは続いているのでしょうか。拾って見ると、巨木のシラカシに似つかわしくないような、小さくてまん丸い実。思わず「かわいわいっ！」と声を発してしまいました。

浪江町幾世橋郵便局の、一枚の「風景印」から、私の新たな「照葉樹林の旅」が始まるような予感がしてくるのです。（2008. 3. 14）

## 孤高の樹 伊藤順子

それぞれも巨大なブナが思い思いに口笛を吹き詩を口ずさみ雲を眺めている中にその樹はあった…。媚びず、おもねず、支配せず、静かに眠るように…。起こさないようにそっと近寄ってみると、今まで見たどのブナよりも太く、何よりも高く果てしない宙へ枝を伸ばしていた！

まるで鳥になろうとしたイカロスのように…。あるいは雛を守ろうと敵に立ち向かう親鳥のように…。あるいは、鎖に繋がれたアンドロメダのように…。背中痛々しい傷跡は孤軍奮闘した親鳥の名誉の負傷か…。焼け焦げた翼の跡か…。カシオペアならぬ人間の奢りの犠牲となったアンドロメダの悲鳴か…。空気までもがモスグリーンの神々しい森の中ふと十字架に傷ついたキリストを思った…。

巨木が当たり前のように育つ豊かな森でも、広い空間から見ればほんの小さな森…。しかも直ぐそばまで故なき開発の手が伸びる形を変えた踏み荒らしが襲う…。何も出来ない無力な自分が居る。ただ、このブナの森をそして孤高の樹をないがしろにする輩を私は許さず軽蔑し続けるだろう、地の果てまで。



イラスト 伊藤順子

## 鹿狼山から 4 ～次世代を担う子供たち～ 小幡 仁子

鹿狼山（かろうさん）は公園のような山なので、幼い子供から小学生の 5、6 年生くらいまで、いろいろな子供たちが登ってくる。幼い子は、母親に小さな手を引かれたり、父親の背中に背負われたり、途中でおやつなどをもらいながら、ゆっくり登ってくる。ちょっと大きくなると、大人の先になって走ったり、棒などを振り回しながら元気に登ってくる。里山に子供の声が響くのはいいものである。

昨年秋のことだった。行政区で年に一度ある鹿狼山登山・芋煮会ということで、祖母に連れられて 5 歳くらいの男の子がいた。とても元気な子でちょろちょろ動くから、おばあさんは気が気ではないようだった。頂上から下りるときに「ばあちゃんと汽車ぼっぼしよう」という話でもまとまったのか、おばあさんは紐の輪を孫にかけて歩き始めた。孫が道から転落したりしないように気を使ったのだろう。私の目には、そんなことをせずとも達者なのは孫のほうで、足元が危ないのはおばあさんのように思えたけれど。

おばあさんに声をかけると、「いやあ、この孫には参ったー」という。「元気があってよいじゃありませんか」

せんか」というと「は一、山の上でも何だか宝探しだとか言って、石ころひろいしてんだあ。つるつるした石を拾ってなあ。鹿狼山、海だったんだなあ」という返事。傍らには、なかなかの面構えの孫が手にしっかりとその宝物を握っていた。「おばちゃんに宝物見せて。お願い」と言うと、握りこぶしを開いてくれた。ちょっと汚れたお手々の中には何の変哲もない茶色の石ころが2つ。確かに海にある石ころのようにつるつるしていた。「すてきな宝ものね」と言うと、嬉しそうににこにこしていた。

新地町は16の行政区があって、それぞれの地区で春には花見、秋には芋煮会などの行事をもつ。また、空き缶拾い・清掃活動神社の夏祭り・秋祭りもある。祖父母が孫

を連れていろいろな行事に出かける姿は珍しくない。私の息子たちも小さいときは、祖父母の世話になって鹿狼山に登ったものである。中学生になってからは部活動や、友達と遊ぶのがよくなって、親からも離れ、まして祖父母と一緒に地区の行事にでるということはなくなった。それでも、祖父母と過ごした思い出は貴重な経験として残っているに違いない。

小学校も高学年になると、体力がついてくるのか、保護者は後ろの方について、子供達だけのグループで登ってきたりする。人も多く、整備されているので離れていてもそう危険はない。そして、子供たちは頂上にある鹿狼山神社の手前で必ず立ち止まる。そこは、鹿狼山で一番高度感があり、眺めのよい場所だ。東に大海原がずっと広がり、道路や町並み、森や池や田んぼなどが一望できる。



宝物はつるつるの石



### 鹿狼山の頂上直下からの眺めを楽しむ子供達 鹿狼山の頂上直下からの眺めを楽しむ子供達

子供達はこの場所に来ると「うわーっ、すげえぞー」と声を上げ、しばし呆然としてこの眺めに見入る。私も鹿狼山の中で最も自慢できる眺めだと思っている。水平線が緩やかにカーブしており、地球が丸いということも実感できる。時折、船が見えることもある。

しかし、このような眺めも大きな木は伐採して、ツツジなどの低木を植栽し、手入れをしているからこそ得られるものである。昔、私が子供のときにこの眺めがあったかどうかは全然覚えていない。ただ、頂上付近は広い萱の原だった。その萱の原を掻き分けて頂上にたどり着いたことだけは覚えている。登山道は昔からあったはずだから、萱を掻き分けて登る必要はなかったと思うが、近道をして誰よりも早く登ろうとしたものか。鼻の中が萱の埃で黒くなったことも覚えている。昭和30年代は萱は必要なものであったから、こんな急斜面でも植えたのであろうか。そのころにこんな展望を得るために山を整備するとは思えないから、大海原は見えなかったかもしれない。

商売がらか、子供が好きである。無垢な子供達、無邪気な子供達を見るたびに、この子供達の将来が恵まれた明るいものであってほしいと思う。鹿狼山に登る子供達は、長じてこの山をどう思い出すだろうか。一緒に登った祖父母や家族のこと、整備された登山道、素晴らしい眺望、折々に咲く花や小鳥たち、コナラ・ケヤキ・シデなどの落葉広葉樹。心の片隅にでももち続けることができるであろうか。

このような美しい里山を保持しようと思えば、手入れは続けていかなければならないだろう。どの程度手を入れていくかが問題である。現時点でも、これは整備しすぎだろうと思われる部分がたくさんある。自然と人間の生活とをどのように折り合いをつけていくかは永遠のテーマである。私達は、次世代の子供達へ豊かな自然を残すことを忘れてはならない。

## 穂積さんを偲んで

河上 瞭治

白銀に輝く一切経、吾妻小富士を右に、箕輪山を左に従え、黒々とした高山は長く続く尾根を麓まで伸ばしていて、そこには伐採された痕が1点もなく完全に森林に覆われています。これは穂積さんの努力によって残された自然遺産であります。

20年前大型開発に乗り遅れまいとする福島市は、地域活性化の美名の下、高山の国際的スキー場建設を打ち出しました。これに対して自然環境破壊を憂える市民が「高山の原生林を守る会」を結成して反対運動を展開し、その初代代表に選ばれたのが穂積さんでした。代表としての穂積さんの活動は目覚ましいものがあり、署名活動にはあらゆる知己を頼り、どこにでも自転車で行きました。当時私は同じ町内に住んでいましたので、朝早く又は夜に参られ活動の現状などを話して行かれました。打ち合わせ会や会議ではわが道を行くで、決められた時間などは全く関係なく、自分の思うところを情熱をもって説明報告していました。穂積さんの持つカリスマ性はこの寄せ集めの団体をまとめ牽引していくには必要で、多少の脱線は許されるものでした。

当時種々の名目を挙げて乱開発に精を出した国や自治体は、今は環境保全を盛んに唱えています。これに対し最初から故郷の自然を守り、これを後世に伝えようとした当会のリーダーとして活躍され、その基礎を築いた穂積さんに改めて敬意を表し、ご冥福をお祈りいたします(2008.2.12)。



第2回観察会「高山山麓ブナ観察会」参加者に囲まれる穂積氏(前列:1987.10.18)

## 穂積正さんの出された本について

奥田 博

高山の原生林を守る会の初代会長であった穂積正さんが2008年2月厳寒の日に逝去された。代表時代は高山の会をグイグイと引っ張り、スキー場建設を断念させる活動で常に先頭に立っていた。穂積さんの残した論文や書籍が数多くあることは知られていない。この会報でも紹介してきたが、私の知る限りでの本を簡単に紹介したい。

■ブナが危ない!東北各地からの報告(無明舎出版)1989年3月10日:東北各地の自然保護運動を「ブナ」という切り口での報告。9箇所から9人が現状を訴える。穂積さんは「高山スキー場建設はいかにして断念したか」というタイトルで24ページほどの報告を寄せている。不思議だったのはタイトルで、スキー場建設が断念したかのような印象を持たれる。現実、この本の発行から10年以上経って高山スキー場は正式に断念されたのだ。

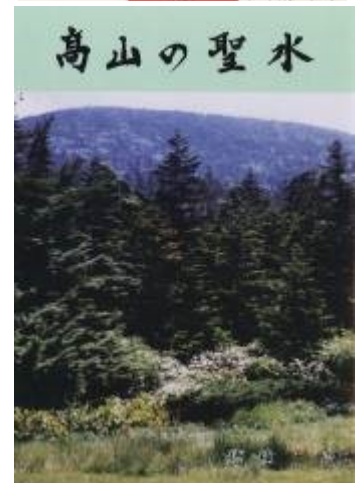
◆福島の山野草(自費出版)1995年6月30日:20年かけて539種類の山野草を一冊にまとめた。写真と解説を一点一頁に収めたもの。本人の信夫山から高山までの調査によるもの。

●歌集「信夫野」(自費出版)2000年1月15日:700首余収録。「高山回顧」には激怒の24首が詠まれている。「開発を強行されんか阻止抵抗吾キャタピラーの下敷死なむ」

●歌集「教育散歩」(自費出版)2002年3月1日:90歳記念出版。387頁の大作。「高山の自然保護の感謝状無けれど吾は何も悔いなし」

■「高山の聖水」(自費出版)2003年11月30日:高山の自然保護運動前半部分を描いたもの。彼は添えられたあいさつ文に「水の大元を絶やすことは絶対出来ない、その信念のもとに、反対運動をした実践記録であります。わがふる里が緑と水の潤う美しい郷として永遠に栄えることを乞い願ひ、本書をお読み頂ければ幸甚に存じます」。これは穂積さんの「聖水」に対する思いであろう。

●歌集「寂光」つぶやき(自費出版)2005年12月20日:穂積さん最後の歌集。「原生林の行方」には5首が詠まれている。「高山の開発のあとの災害を予測せずして実施はあらし」



## 東北ブナ紀行（29）

奥田 博

焼石連峰はまとまったブナ林が残っている。これまでも牛形山、丸子峠、天竺山などのブナを紹介してきた。今回は夏油三山の二つである駒ヶ岳と経塚山。経塚山は焼石連峰の南端の山として知られるが、さらに道はないが尾根続きに駒ヶ岳がある。これらを結ぶ稜線や山麓にはまとまってブナ林が残されている。

### 55) 駒ヶ岳

全国に数ある駒ヶ岳であるが、地味な存在の駒ヶ岳である。夏油温泉から登山道を歩き始めると、すぐにブナ林の中の登りとなる。このコースは山頂まで、ブナの林をたどることになる。ブナの新緑の季節に歩いていたら、途中のブナを鑑賞して戻るといふハイカーに出会ったことがある。確かにブナの新緑を見るだけでも価値があるのかも知れない。ほとんどが正統的？ブナ林であるが、山頂近くになると、わい性化してくる。山頂には赤い神社がまつられている。

コースタイム：夏油温泉（2時間）山頂（1時間30分）夏油温泉



駒ヶ岳途中のブナ林

### 56) 経塚山

経塚山は焼石連峰の一山で、連峰では最も奥深い峰である。この山に登るには、山中で一泊することになる。山中には金明水小屋があって、快適な一日が過ごせる。夏油温泉からは何とか日帰り登山が可能だ。暑い夏に登った時にはブナ林の木陰と、水が何よりの楽しみだった。ブナ林を抜ける風を感じ、この時こそブナ林の中は気温で5度以上も低いと実感。汗は噴出すが、根元で休むと汗は静まる。経塚山山頂付近ではお花畑に元気をもらっての山頂だった。

経塚山の名前は、宮沢賢治の作品には一編の詩にしか登場しない。にもかかわらず、賢治は経塚山を経埋むべき山としたのは、その名前であろうか。お経が埋められた塚を経塚と呼んだが、実際この経塚山に、埋められたのは経筒であろうという説がある。



ひばりがなくて

はたけが青くかすんで居る

その向ふには経塚岳だ

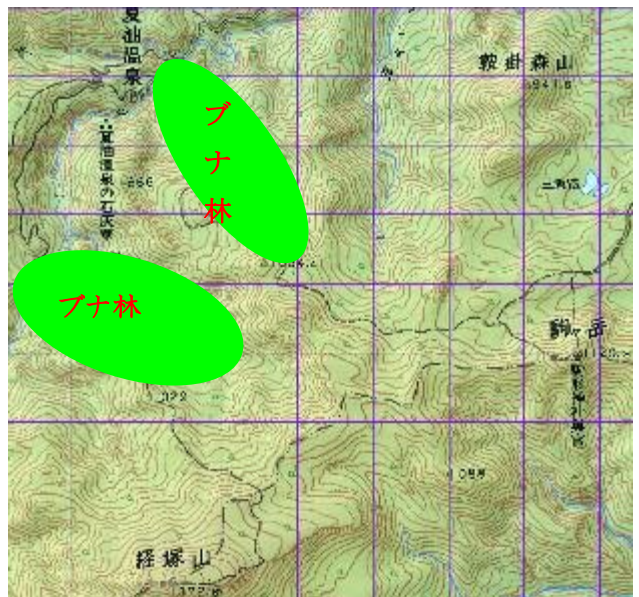
山かならずしも青岱ならず

残雪あながちに白からずだ 「軍馬補充部主事」

正月に焼石岳から経塚山へと歩いたことがある。とにかく、太陽の顔はなかなか拝めない冬の縦走だった。前夜は銀明水小屋に泊まって、焼石岳を越えて金明水小屋まで歩いたが、吹雪の中を彷徨い歩いたといった方が正しかった。

翌日は吹雪の経塚山を越えて、駒ヶ岳に登り、さらに瀬美温泉へと下った。雪は益々強く、下りでもラッセルをする始末。ついに途中でビバーク（不時露営）をしようと決心したが、メンバーは何としても温泉に浸かりたいという。結局明け方の午前二時に、瀬美温泉に到着。執念の温泉に入った時には、涙が出そうだった。

コースタイム：夏油温泉（2時間30分）山頂（2時間）夏油温泉



オノエヤナギ (*Salix sachalinensis* ヤナギ科ヤナギ属)

山間部の湿地周辺や河川沿いに植生する落葉高木。別名をヤブヤナギ、ナガバヤナギ、カラフトヤナギ (学名はサハリン=樺太のヤナギの意) という。バッコヤナギ、シロヤナギと並んで吾妻・安達太良山域に植生する代表的な高木タイプのヤナギであり、この山域では最も植生頻度が高い。バッコヤナギ→オノエヤナギ→シロヤナギの順に植生地の湿性度が高いようである。

バッコヤナギ同様、葉が展開する前に花が咲くタイプの代表種である。開花期はバッコヤナギより遅い。花芽は互生である。短い花柄に2,3枚の小葉を着ける。この花柄の有無や小葉の形態がヤナギの種類を識別する手がかりとなる (バッコヤナギ、カワヤナギは無花柄である)。

苞は細長い軟毛が密生する。また苞の対面に細長い密腺を1個着生する。雄花の小花は雄しべが2本あり花糸は離生し、葯の色は開花始の時期はやや赤みを帯びたオレンジ色であるが満開時には黄色となる。雌花の子房は緑色で細長く柄を持つ。柱頭は黄色で2つに分かれる。

葉は互生で葉の形は細長く先端は長く尖り、葉縁には微細な鋸歯がある。表面は革質で光沢があり無毛、裏面はやや白味を帯びる。冬芽は一個の鱗片で包まれる。幹の色は始め緑色で次第に緑黄色を帯びた灰色となりやがて茶色が濃くなり裂け目が縦に走る。

私がオノエヤナギの花を意識したのは、西烏川で満開の壮木に出会った時で、それまではバッコヤナギとミネヤナギしか認識できず、この頃よりようやくヤナギの個性を感じられるようになった。ヤナギの花が美しいと初めて思ったのは鬼面山で出会ったミネヤナギで、オノエヤナギの花はこのミネヤナギを大型にしたような印象であった。その後イヌコリヤナギの花に出会い、私にとってヤナギの花は明確に早春の観賞の対象となった。



雄花

ルリソウ (*Omphalodes krameri* ムラサキ科 ルリソウ属)

山地の谷筋に生える多年草。花の色が瑠璃色であることから名づけられた。瑠璃色とは紫を帯びた深みのある青色を指す。

葉は互生、根生葉は長い葉柄があるが、茎葉は葉柄がない。葉形は先の尖った靴べら状で整う。鋸歯は無い。草姿全体が白い開出毛に被われるが、葉は少なく、葉の表面はやや照りがある。花は頂生花序で、茎の先端から花柄が伸長し、下部3分の1の付近で2分しY字形を呈する。分枝した花柄が巻散花序を形成する。小花は合弁花で花冠先端は5裂し、その基部が花の中央部に突き出て白い副花冠を形成している。雄しべと雌しべは花筒内部に納まっており、副花冠は花の中心へ昆虫を誘うためのものらしい。果実は透明感のある緑白色で形は中央部が窪んだボタン状である。縁にはかぎ状の突起物がある。1小花で分果4果が正方形に着生する。

今から数年前に奥羽山脈のとある山でルリソウの仲間に遭遇した。その花の美しさは格別で早速、図鑑でその名前を調べた。ルリソウとヤマルリソウのいずれかであることまでは絞り込めたが、開花期の形態では判断がつかず曖昧なままでいた。それは一方の種類しか見ていないためであった。2007年に土湯周辺でこのルリソウを確認することができ、その花はヤマルリソウであることが判明した。ヤマルリソウ (*Omphalodes japonica*) は果実の縁にかぎ状の突起物がないことでルリソウと区別される。草姿もロゼット状でルリソウとは全く異なる。また葉は厚みがあり開出毛の密度も濃く感触はピロードの様である。花柄は短く花は密着して咲き、小花はルリソウより大きい。ヤマルリソウは福島県が北限とされるがルリソウは北海道まで植生する。最近、北陸特産種のエチゴルリソウもヤマルリソウとされた。ヤマルリソウは形態的に環境変異が大きいのかもしれない。



## 第96回自然観察会案内：高湯蟹ヶ沢の早春花観察会

日時：2008年4月27日（日）8：30～15：00

集合場所：四季の里正面入口駐車場 集合時間：8：30 参加定員：20名

内容：蟹ヶ沢周辺のみずバショウ、イワウチワ群落を中心とした早春花を観察します。

準備品：昼食、冬用登山靴または防寒靴、防寒服、防寒帽子、手袋、ワカンまたはスノーシュー、ストック、筆記用具、（ルーペ・双眼鏡・各種図鑑）

参加費：保険代300円 参加申込期限：4月26日（土）

参加申込先：高橋淳一（024-593-1990・080-3320-1804）または佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時までお願いします）。

## 第97回自然観察会案内：龍ヶ岳観察会と植林地除草ボランティア作業

日時：2008年6月8日（日）7：30～15：30

集合場所：福島県農業総合センター果樹研究所（旧果樹試験場）集合時間：7時30分

参加定員：制限無し

内容：これまで植林を実施した箇所の除草作業等を行い、昼食後、龍ヶ岳山頂を往復し、レンゲツツジ、ヤマツツジ、ムラサキヤシオ等の樹木の花やアズマギク、ベニバナイチヤクソウ、サンカヨウ、チゴユリ等草本類を観察します。今回は祠の祀られている山頂を目指します。

準備品：登山靴（長靴）具、帽子、手袋、着替、昼食、あれば（草刈鎌、剪定鋏）

参加費：保険代300円 申し込み：6月7日（土）

日程：果樹研究所 8.00→鳩峰植林地 9.00→現地除草作業 11.30（昼食 12.30）→鳩峰峠 13.00→龍ヶ岳山頂 14.30→鳩峰峠 15.30→果樹研究所 16.30

\*なお、予定は現地の気象状況により変更する場合がありますので、予めご了解願います。

参加申込先：高橋淳一（024-593-1990・080-3320-1804）または佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時までお願いします）。

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

【編集後記】 ■「高山の原生林を守る会」初代代表の穂積正さんがこの2月に逝去された ■会創立当時、会計と会報を担当していた私は、穂積さんの家に伺う機会が多かった ■息子さんと同年代ということで、奥さんにはとても優しくしていただいた ■どちらの提案か忘れてしまったが、鳥子平から土湯までの高山の登山コース沿いに植生調査をしようということになった ■秋も深まった頃に、穂積さんの息子さん（穂積正一氏）と医大生のWさんが加わり、吾妻小舎一泊で高山を踏査した ■その時のメモが、私の高山植生調査の原点になった ■後で知って驚いたことだが、私の両親は穂積さんの教え子だったらしい ■私は、生徒として縁があったわけではないが、山に登るだけの対象とみていた私にライフワークとしての森林植生調査に目覚めさせてくれた恩師であることは間違いない ■穂積さんから引き継いだ高山の自然植生をこのまま次の世代に渡していきたい（MS記）。



高山山頂三角点にて（1987.10.4）  
この三角点は、現在は発達したチシマザサ群叢の中に埋もれている

「高山」高山の原生林を守る会会報 第64号 2008年3月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：高橋淳一 Phone 024-593-1990（夜間7時～9時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500円）を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・鈴木